

投資の視点

災難続きの2011年を振り返る

大震災、欧州危機、タイ洪水・・・

2011年を表す漢字は「絆」に決まったようだが、実際には「災」の年であった。3/11に発生した東日本大震災はまさに想定外の規模、被害となった。東電福島原子力発電所の放射能漏れ事故も想定外。また、サプライチェーンの寸断により、自動車などは大幅な減産を強いられた。現在でも被災地の復興はほとんど進んでいないし、原発事故の後遺症はなお続いている。

サプライチェーンの回復が予想以上に進み、安心感が広がりつつあった夏には、欧州債務問題が深刻化し、世界株安を加速させた。ギリシャ国債の暴落をきっかけに、欧州金融機関の経営悪化懸念が台頭、ユーロ圏各国の足並みの乱れも混乱を拡大させた。国債価格下落は、イタリア、スペインにも飛び火し、欧州は年末になっても不安定な状態が続いている。

10月初旬から被害が広がったタイの大洪水も日本企業への被害は甚大となった。浸水被害は数百社に及び、自動車、エレクトロニクスなどの拠点で生産停止に追い込まれた。

さらに、急激な円高も輸出企業にとっては災難となった。ドル円レートは、10月下旬に史上最高値75円/\$台を付け、その後も円高水準で推移している。円高は、短期的な業績面でのマイナスだけでなく、日本企業の国際競争力低下、空洞化の加速を招くものとして危惧される。

株価低迷は構造的な側面も

2011年の年初は、リーマン・ショックからの回復軌道が持続するとの見方から、

日本の株式市場も堅調が続くとみられていた。市場関係者の日経平均の2011年高値予想は12,000～13,000円に集中、多くの人が年後半に高値をつけるとみていた。足元の日経平均は8,500円前後で、年初予想との乖離は約4,000円と大きい。

この乖離は、前述の大震災等の不測の要因が大きい。日本株からの投資家離れも裏側にあるように感じる。日本株売買の主役である外国人は夏以降売越し基調、個人は足元で買越し基調であるが、全体を押し上げる勢いはない。このため、1日当たり売買代金は1兆円割れが常態化しつつある。株価上昇には企業業績の向上が不可欠だが、政治を含めて日本が変わろうとする姿を内外に示すことも必要ではないだろうか。

2012年は「災い転じて福」の年を

2012年は、欧州問題を引きずることになりそうだが、光も見えつつある。

まずは、大震災からの復興がいよいよ本格始動し、日本の成長率を押し上げる効果が期待できること。自動車等の生産も東日本大震災などによる大幅減産の遅れを取り戻すため、増産となる可能性がある。

こうしたことを背景に、2013.3期の企業業績は増益に転じる可能性が高い。増産効果が期待できる自動車や、在庫調整でも苦しんだエレクトロニクスの利益はV字回復が期待できる。建設などは復興需要本格化のプラス効果が期待できるだろう。

株価が上昇すれば、様々な好循環が生まれてくる。2012年が「福」の年になることを切に願いたい。(高橋)